

第4節 資本と収入とへの剰余価値の分配比率から～

【～P156、4行目】

剰余価値が資本（投資）と収入（消費）に分かれるかは、剰余価値の大いさによって決まる。剰余価値率を上げる事情を再確認する。

【P156、5行～P164、7行】

1. 労働力の搾取度

労働賃金は、労働力の価値として支払われると仮定したが、実際には、この価値以下への引下げが重要な役割を演じているので考察する。

JS ミルは「～賃金は必要ない」というが、実際労働者は空気だけで生きていけないので無理はあるが、資本家としての抑えたいという考えでもある。

また、『産業及び商業にかんする一論』の著者は、イギリスの労働者は贅沢な暮らしをして賃金が高いが、フランスの労働者は粗衣粗食で賃金が1/3安い。フランスの様にするのは困難ではあるが、実際にそのように生活しているのだから到達できないものではない。

20年後にアメリカのトムソンが安い代用食で食費を抑える論集（料理本）を発表した。（しかし、資本主義的生産の進歩で、不正品仙蔵が増えた。）（～P160、後7行）

数十年間のイギリスの借地農業者と大地主は、労働賃金を最低額よりも払うため、教区救恤金きゅうじゅつぎんを使い労働賃金を抑えた。（教区一宗教組織が行政や宗教的奉仕を行う地域単位。救恤金一貧困者等援助の寄付、義援金。）

労働者の必要な消費を奪うことが資本の蓄積にいかなる役割を演じているかは、家内労働が示している。この諸事実は後の本編に示される。（～P162,8行目）

すべての産業において、総労働時間を1.5倍に増やすことにするには、総人数を1.5倍にするか、1人の労働時間を1.5倍にするかである。前者は、賃金と労働手段の追加資本の前貸しが必要となる。後者は、僅かな残業代と労働手段の摩損である。労働時間延長により、更なる剰余価値を増大させる。

採取産業は、原料がタダだから働かせただけ剰余価値が増大し、農業は、農地拡大は種子と肥料の追加はあるが、働かせることにより土壌の豊饒性を高め生産物、ひいては剰余価値を増大させる。

【P164、8行～P170、後6行】

2. 労働の生産力の増大

労働の生産力があれば、生産物量が増加し、剰余価値は増え、資本家は、資本と消費の割合を変えず、さらに商品の低廉化が資本家により享楽手段を提供する。

一方、生産の増大による賃金の上昇があったとしても、剰余価値以上の上昇はありえないので労働者の低廉化となり、剰余価値率が増大する。

労働の生産力の発展は、現資本、すなわち既に生産過程にも影響する。不変資本の一部は、長期間かけ消費され、再生産されるか新品に代わる。これら不変資本（機械等）を作成する工場でも生産力の増大しており科学と技術の発展でより効率的、低廉価な機械等が現れる。また、他の不変資本の原料、補助材料は継続的に絶えず再生産さる。したがって改良された方法が採用されると、それは追加資本、既存の資本にほとんど同時に効果を発揮する。化学のあらゆる進歩は、有益な材料の数を増やし材料の利用を多様化し、資本の増加とともに追加投資を拡大させるだけでなく、今まで生産過程、消費過程で出た排泄物を再生産過程の循環へと再投入することを教え、資本の先行投資を要することなく新たな資本材料を作り出した。労働力の負担を高め剰余価値を増大するのと同様に、科学と技術は、機能している資本の大きさに依存しない膨張力を作り上げる。この膨張力は、更新段階に入った現資本部分にも反作用する。現資本は、旧形態での社会的進歩を無償で新形態へ取り込む。同時に、機能している資本の部分的な価値減損が伴う。しかし資本家は、この価値減損を、労働者の搾取を高めることに求める。（～P166、後7行）

労働は、消費される生産手段の価値を生産物に移転する。一方、労働が生産的になれば、比例して与えられた労働量による生産手段の価値と量が増大する。したがって、同じ労働量が生産物につける新価値は同量でしかないとはいえ、その生産物に移転する旧資本価値は「労働の生産性の向上とともに増加する。（例としてイギリスと中国、労働者不足による羊毛生産を記述。）

労働は、生産手段効果、規模、価値の増大につれ、したがってその生産力の発展にともなう蓄積が進むにつれ、たえず膨張し続ける資本価値を、たえず新たな形態で保存し、永続化する。労働のこの自然力は、労働を取り込んでいる資本の自己保存力であるかのような形で現れる。このことは、労働の社会的生産力が、資本の属性であるかのような、また、資本家による剰余労働の取得が資本の自己価値増殖であるかのような形で表れる。商品の価値が、貨幣で現わすように、労働のすべての力は、資本の力として表わす。

【P170、後5行目～P171、2行目】

3. 労働手段の無償奉仕

建物、機械装置、排水管、労働家畜、各種の装置のように長短期間にわたり、たえず反復される生産過程で一定の利用効果を上げる労働手段は、暫時的に摩耗するだけであり、その価値の一部分しか失わないし、これも一部分しか生

産物に移転しない。これらの労働手段が、生産物に価値をつけることなく生産物形成者として役立ち、全面的に使用されるが部分的にしか消費されなければ、それらは自然力と同じ無償奉仕を行うようになる。生産力の増大がこの無料奉仕の蓄積を増大する。(～P171,5行)

過去の労働は、今の労働に対し労働手段一式の形態で資本家のものだとし
て言われる。奴隷使用者が、労働者自身を彼の奴隷としてしか考えられないの
と同じである。

【P171、後1行～最終】

4. 生産規模の拡張

資本が継続的に蓄積によって増大し、前貸し資本の量とともに生産が拡大
すればするほど、生産のすべてのバネがより精力的に働くのである。

第5節 いわゆる労働基金

【～P176、後2行目】

資本は固定した量ではなく、社会的富の弾力性のある一部分で、剰余価値の消費と追加資本の分割によりたえず変動する。さらに、現に機能している資本の量は、これに合体される労働力、科学、土地により、資本の弾力的な要素となるとわかった。

しかし、古典派経済学は、社会的資本を固定した作用度をもつ固定した量と考えることを好んだ。この偏見を始めて定説として確立させたのが、平凡で物知り顔する(銜学的)ジェレミー・ベンサムで、この定説は、マルサス、ジェームズ・ミル、マカロック等にも弁護論的目的のため利用された。ことに、資本の一部である可変資本の労働総賃金、いわゆる労働基金(財源、原資)は、固定している(社会的富のうちから自然の鎖によって区切られた超えることのできない特殊部分として虚構された)という説。この定説の根底にあるのは、一方で労働者は、非労働者の享楽手段と生産手段への社会的富の分配に口出し(容喙)できない。他方で、例外的な恵まれた場合にのみ、富者の収入の犠牲において労働基金を拡大できる。

【P176、後1行目～最終】

労働基金の固定量という説が、いかにいい加減かという典型例として、フォーセット教授を挙げ、彼は、現実に支払われている労働賃金を総計して、これが労働基金の価値総額だと主張。この総額を労働者の人数で割れば各労働者個々の平均受取額を見ることが出来る。さらに、イギリスで毎年蓄積される富の総体は、一部は国内産業を維持するために使われ、残りの多くは他国に輸出される。つまり、イギリスの労働者から搾取され増加する剰余生産物の大半は、他国において資本化され、労働基金も輸出される。